

## 東西文明の比較 (14)

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

前回、登呂遺跡について触れました。そのくだりを復習してみます。

「この遺跡は、住居址、水田址、森林址の三つの部分からなり、12戸の竪穴住居址と2戸の高床式倉庫址があり、水田は、総面積は約7万平方メートル。住民は60人ぐらいです」。

このような集団を“ムラ”とか“ムレ”と呼びます。そして“ムラ”がいくつか集まって出来た集団を“クニ”といいます。考古学や歴史学では、“クニ”というのは政治的地域集団をいい、後生の国家とし

ての“国”と区別するため、学術論文ではあえて“クニ”とするそうです。

蛇足ながら付け加えますが、漢字の「國」は、四方を壁で囲む(口)+或(場所の意)。中国を訪れて城壁に囲まれた都市などを見て、改めて「國」の由来を知り、感心したものです。“クニ”を私なりにイメージすると昔の「村」か「集落」のようなものではないかと…。

### 楽浪海中に“倭人有り”

弥生時代、中国では、日本のことを「倭」と呼んでいました。正史「漢書」の地理志によれば、「楽浪海中二倭人有り、分カレテ百余国ヲ為ス。歳時ヲ以テ来タリ献見ストイウ」とあります。

倭が百余国に分れ、その全部か、そのうちのいくつかの“クニ”が楽浪郡の役所に通貢したことを示しています。おそらく紀元前2～1世紀の史実と思われます。では、日本がなぜ「倭」になったのでしょうか。諸説あるようですが、もっともらしい説を述べてみます。

一つは、初めて楽浪郡におもむいた倭人をみた役人が、そのおとなしくて従順なその態度を見て「倭」と名付けた、というものです。もう一つは、当時の倭人は背が低かった(平均身長は150センチぐらい)ので「矮」とし、後に「倭」に直した、という説です。

### 「後漢書」東夷伝より

「建武中元二年、倭ノ奴国、貢ヲ奉ジテ朝賀ス。使人自ラ大夫ト称ス。倭国ノ極南界ナリ。光武賜ウニ印綬ヲ以テス」という文章と、もう一カ所、「安帝ノ永初元年、倭ノ国王帥升等、生口百六十人ヲ献辞ジ、請見ヲ願ウ」があります。

奴国は、後世「那の津」とか「<sup>な</sup>儼<sup>あがた</sup>の県」と呼ばれた地域、すなわち現在の博多周辺を指します。また「倭国ノ極南界ナリ」の意味するところについては、「倭には南朝鮮の国々を含んでいる」という説(井上秀雄氏)があります。

建武中元二年は、西暦57年です。この時、光武帝は奴国の王に印綬を贈っています。そしてその印が江戸時代の天明四年(1784)、博多湾口の志賀島から掘り出されたことは有名です。

「漢委奴国」と刻まれた金印です。「倭」が「委」になっていたのが疑問視されましたが、この金印は「本物」です。

### 「魏志倭人伝」より

「魏志倭人伝」は正確には、「三国志」のうち、「魏志」の「東夷伝」のなかの倭人条といいます。

「倭人八帯方ノ東南ノ大海ノ中ニアリ、山島ニ依リ国邑ヲ為ス。旧八百余国、漢ノ時ニ朝見スル者有リ、今使訳通ズル所八三十四。…」ではじまる「魏志倭人伝は、文字数約2000字ほどです。そこに、邪馬台国と卑弥呼のことが書かれています。

「邪馬台国」はどこにあったのか?「畿内か北九州か」。歴史の好きな日本人の間で、古来、論争になっています。本文では、この論争は脇に置

きます。

その理由は、証拠としての「三国志」の原本(3世紀)が無く、最古の版本でも12世紀のもので、原本から12世紀の空白部分における邪馬台国の記述がある史書には「邪馬臺国」とか「邪馬壹国」などとあります。長い間に写本を重ねるうちに「臺」が「壹」にかわったと考えられます。いずれにしても、証拠である「原本」が無い以上、結論はありません。

なお、「魏志倭人伝」には大人・下戸・奴婢の三階級が示されています。大人は支配層の人々、下戸は下層民、奴婢は隷属民をいいます。内乱で生け捕りされた捕虜が「生口」であり、奴婢の原点ではないでしょうか。

「魏志倭人伝」と同時期に編纂された「梁書」に「漢ノ靈帝ノ光和中、倭国乱レ相攻メ伐チテ、年ヲ経タリ」とあります。光和中とは中国の光和元年(178)からの6年間を指しています。この時期は「魏志倭人伝」と一致しています。つまり、邪馬台国は、男子が王であったが、「倭国乱レ、相攻伐スルコト暦年」だったため、女子をたてて王としたと書かれています。いよいよ卑弥呼の登場です。

卑弥呼「鬼道ヲ事トシ、能ク衆ヲ惑ワス」

「魏志倭人伝」には、こうあります。

「其ノ国、本亦男子ヲ以テ王ト為シ、住マルコト七八十年、倭国乱レ、相攻伐スルコト暦年。乃チ共ニ一女子ヲ立テテ王ト為シ、名ツケテ卑弥呼ト曰ウ。鬼道ヲ事トシ、能ク衆ヲ惑ワス。年已ニ長大ナルモ、夫婿(ふせい)ナク、男弟有リテ治国ヲ佐ク。王ト為リシヨリ以来、見ル有ル者少ナシ。婢千人ヲ以テ自侍セシメ、唯男子一人有リテ飲食ヲ給シ、辞ヲ伝エテ出入ス。居処ノ宮室ハ楼観・城柵ヲ嚴ニ設ケ、常ニ二人有リテ兵ヲ持シテ守衛ス」。卑弥呼は、もっぱら「祭祀」を司り、その弟が「政事」を預かっていたようです。

そのほか、卑弥呼が景初三年(239)六月に、大夫難升米を魏の都洛陽に遣わし、その見返りに、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号と金印・紫綬を賜ったことが伝えられています。

## この頃の大陸事情

弥生時代といわれていた、紀元前数世紀から後3世紀、西の大陸はどのようなことが行われていたのでしょうか。ひとくりにすれば、「文明の交流」「シルクロードの序曲」と言えるのではないのでしょうか。東西の文化が激しく行き来したダイナミックな時代でした。

中国では秦の始皇帝が中国を統一(前221年)。北方匈奴の侵入を防ぐために「万里の長城」を建設。秦が滅び、劉邦と項羽が争い劉邦が勝利して漢(前漢)を建国(前202年)。前100年頃から漢の威光はめざましく、中央アジア諸国が貢ぎ物を納めた。25年後漢が成立し、明帝がインドに使節を派遣。パルティアの使節が中国を訪問。87年パルティア王国の使節が訪中。166年ローマの商人が来中。そして日本人が大好きな「三国時代」(220年)が始まります。

インド・アジアに目を向けると50年頃に扶南(カンボジア・ベトナム)にヒンズー教徒の王国が誕生。100年、インド使節がローマを訪問し、ハドリアヌス皇帝と面談。150年頃ローマの貨幣がオケオ(ベトナム)、マドラス(インド)へ伝わる。中央アジアへの進出、そしてエジプト・ペルシア・ヨーロッパまで広がる。前139年張騫二度にわたって西域を旅し、交易の基盤を築く。前60年漢が西域都護を設置。前50年頃、絹がローマに伝わる。97年に中国の使節「甘英」がペルシア湾へ。

年表からピックアップしただけで大陸の文化交流が広範囲であったことが分ります。日本列島が、海に囲まれ孤立した状況で、穏やかな弥生時代を築いていたかがわかります。